

#### 第4回 学生野球憲章検討委員会

1、日 時 平成20年10月31日（金）午後1時～3時

1、場 所 明治記念館

1、出席者 石井紫郎、浦川道太郎、辻村哲夫、望月浩一郎、野村徹、西岡宏堂、  
田和一浩、大谷哲夫、田名部和裕 各委員

説明者 岡野俊一郎氏（IOC委員）

陪席者 南原理事、内藤事務局長、小森高野連事務局長

○石井委員長 本日は、お忙しいところ、皆さんありがとうございます。

今日は、御存じのとおり、日本サッカー界、あるいは日本スポーツ界を代表される方でいらっしゃる岡野俊一郎氏にお越しいただきましてお話を伺う、ことがメインのメニューでございます。

簡単に、皆さん、もう御承知とは思いますが、御紹介申し上げます。

岡野さんは、東京の小石川高校——。都立五中の時代の御卒業。そして、浦和旧制高校を経て、東京大学にお入りになり、サッカー部に入って活躍なさいました。1953年には、全日本大学サッカー選手権大会で優勝という偉業をなし遂げられております。

御卒業は、文学部の心理学科でいらっしゃいまして、多分、その研鑽が、今日のさまざまなサッカー界におけるコーチ、監督、あるいは協会のリーダー、あるいは国際的な御活躍、国際オリンピック委員会の委員等の仕事にも、ベースになっているのかなと、密かに思っているところでございます。

1962年には、日本代表のコーチ——当時の監督は長沼健さんでいらっしゃいますが、その下のコーチをなさいました。1964年には、日本代表、オリンピックでベスト8、それから次の1968年には、メキシコオリンピックで銅メダルを獲得されました。その後、日本代表の監督を歴任された後、サッカー協会の理事に御就任になりました。それから、日本オリンピック委員会——JOCの常任理事にも御就任になりました。1990年以後、国際オリンピック委員会——IOCの委員になっておられます。それから、ワールドカップの組織委員会もやっていますし、1998年から、サッカー協会の会長をお務めになりました。等々、今まで岡野さんが、サッカー界はもとより、日本のスポーツ界に非常に大きな足跡を残してこられたという方であることは、今さら申し上げることもないと思います。

本日は、本当に大変お忙しい方でいらっしゃると思いますが、お願いいたしましたところ、快くお引き受けいただきました。それでは、私からのご紹介はこれくらいにいたしまして、早速、岡野さんにお話をさせていただきたいと思います。

○岡野氏 ご紹介いただきました岡野でございます。こういう席にお招きいただいて、考えていることを自由に話してよろしいということで、参上いたしました。

同じスポーツ界といっても、いろいろ立場がありますので、皆様方のお考えと、大分、違う考え方もあるかと思ひますし、「それは全く同感だな」と思っていた部分もあるかと思ひます。そんなことで、私の立場、1つは、サッカーで長年やってまいりましたので、サッカーの一つの考え方、もう一つは、野球のほうでいくと、山本英一郎さんと一緒になって、ロサンゼルスでのデモンストレーションのときから、いかに野球をオリンピック競技に入れるかということで、実は裏で10年以上やっておりましたので、そういう立場でオリンピックにおける野球ということを含めて話をさせていただきたいと思ひます。

最初に、私なりのスポーツというものの考え方がありますので、そのことをちょっと話させていただこうと思っております。

正直言ひまして、私は、野球は随分やりました。最初は、三角ベースです、戦争前ですから。学校から帰ると、ランドセルを放り出して、道路のところに、電信柱1壘、左側の道路にあるごみ箱は2壘、ホームベースは道路の上に——白墨ではなくて、昔、蠟石というのがありましたね。蠟石でベースを書いて、三角ベース。投げると打てないからつまらない。軟式庭球のゴムのボールを使って、握りをキュッとやるとカーブが出たりして、それを手で打ってやる。私は、あれはスポーツの原点だと今でも言っております。なぜかという、野球にないルールで野球をやっているということです。つまり、子供たちにとって一番楽しい野球は、三角ベースだということです。

なぜか。どこの野球のルールブックを見ても、ベースがホームを入れて3つでよいとはどこにも書いていない。必ず、ファースト、セカンド、サード、ホームとあるわけです。しかも、ゴロでよろしい、こんなこともありません。かつ、一番重要なのは、審判がないことです。アンパイアはいないんですね。やっている仲間同士でセーフかアウトかも、お互いに「セーフだ」、みんなが納得すればセーフです。「いや、アウトじゃないか」、多少議論が分かれても、「やっぱりアウトだな」と多数決になれば、自然にアウトになります。こういうところに、私は、ある意味でいくとスポーツの原点があると考えているわけです。

さらに、もっと昔に行くと、私は、スポーツは文化だと常に言っております。そして、この

次が、多少、皆様方と違うかもしれませんが、体育とスポーツは違うのだということを、常に私は主張しているわけです。

スポーツというのは、ある意味でいきますと、人間が食べるもの、生活に追われなくなって、初めて身近で楽しもうというところに生まれてきたものです。一番よい例は、狩りです。スポーツの原点は狩りだと、世界中で、一応、言われております。

例えば、鹿を追う。あの鹿をとらなかつたら、家族が飢え死にする。この冬の食料のために、あの鹿をとろうではないかと。ところが、とろうとする仲間が大勢いるわけです。ここに、競争が生まれるわけですね。あの鹿をと。ところが、その間は狩りもスポーツにはなりません。生活が多少落ち着き、ある村々にて、「この中で一番、誰が弓がうまいかね。競争しようよ」となると、「では、的の大きさを決めなくては」、「的からの距離を決めようよ」、初めてルールが生まれるわけですね。ここに、スポーツが生まれてきます。これは、ある意味でいくと芸術と一緒にですね。

例えば、フォーク、ナイフ。かつては手で食べていたと思うんですね。それが、肉を切るのに、次は石器時代で石で切ったかもしれない。だんだんと銅、鉄と来て、ナイフができた。あれに、彫金、模様を入れようよなどというのは、全くゆとりがなかつたらできないですね。その中に、彫金という芸術が生まれてくるわけです。

というように、スポーツの原点は文化。芸術と全く同じ、人間の生活の中で、この生活をエンジョイするために工夫して生まれたものが文化です。そして、体育は、文化のスポーツの中の一部、つまり、スポーツの持っている教育的要素を取り出して教科にしたとき、それは体育となります。

実は、私、昭和56年、第13期中教審の委員を任命されまして、2年やりました。終わったと思ったら、59年、中曽根康弘総理から連絡がありまして、文部省の枠を超えて教育の基本をもう一遍考え直そうということで、第3回臨時教育審議会を発足させる。「おまえ、スポーツから出てこい」ということで、1人だけスポーツ界から選ばれまして、3年間、第3部会、初等・中等教育担当で教育の議論をさせていただきました。それが終わってから、また1年たった昭和61年から2年間、第14期中央教育審議会の委員をいたしまして、それが終わると、今度は生涯学習審議会というところで仕事をさせていただき、一番最後は、実は国税審議会という全く畑の違うところで委員をやらせていただいて、これは3期やりましたが、70歳以上はもう指名しないというので、3期終わって終わりました。辞令が出るんですね、財務大臣から。最後の辞令は、宮澤喜一さんからの辞令で、ちゃんとサインが入っています。うちの会社の

——会社というより小さな菓子屋ですが、事務所に掲げてありまして、税務署が来たらすぐ目につくところに、実はかけてあるんですけれども。

そんなわけで、いろいろなことをやりましたが、実は臨時教育審議会で3年のうち1年は、最後の総会で私は手を挙げて、発言を許していただきました。この会長は、京都大学の学長で、大脳生理学の権威だった岡本道雄先生。それ以外に、慶應の塾長、あるいは財界、いろいろなところから、政界も含めて25人委員がおりまして、そこで議論をしたわけですが、「若造で大変恐縮ですが、ちょっと言わせてください」と。一番最初に、教育目標というのを設定いたしました、1年近くかかって。簡単に言うと、知・徳・体——育は入りません——「知・徳・体の調和のとれた人格の形成」、そういう人格を持った人を育てるとというのが教育の目標だと決めたのに、知と徳は議論したけれども、体が一つも議論されていない。私は、「おかしい。知と徳を入れる、その大本は体だ」と、多少、生意気なことを言いましたら、次の2年目が始まるときに、多くの会議の上の皆さんが賛同してくださりまして、急に「スポーツと教育の分科会を設置する。おまえ、言い出しっぺだから座長をやれ」というので、1年間、議論をいたしました。

第3次答申をまとめて出す——1次、2次、最終と4回出したのですが、第3次答申に私たちの1年間勉強したものをレポートで出しました。素案が出てきました。どこにもないんですね、「スポーツと教育」というのが。私はまた手を挙げて、事務局におかしいと。一応、1年間、みんなで議論してつくった、考えたレポートを、どうして章にしてくれないのだと。答弁が震えていましたね。「岡野さんたちの意見は、各省に散りばめられてあります」と。「大変失礼だけれども、こういうのをちゃんと読む人はあまりいない。まずサーッと見て、目次立てを見て、「あ、ここの章を見ようかな」、こういう人はいるけれども、大変失礼だけれども、土台、文章は官庁文学で一つもおもしろくない。どうしても章立てにしてくれ」というので、実は第3次答申の第4章に、「スポーツと教育」という章をつくってもらいました。前文も全部、文部省から出た担当官が書くというから、「だめだ。半分は私に書かせてくれ。官庁文学ではないのを書くから」と言って、実は書かせていただいた。あまりこれが、今、生きていませんけれども、そんなことがあって、私は、基本的にスポーツは文化であるということ、それからスポーツという中に体育というものがあって、これは知・徳・体とは別だと。スポーツの持っている教育的要素を引き出して教科にしたものが体育であると。そうすると、体育は、教育の非常に大きな分野に入ってくるわけですね。知・徳・体、3つありますけれども、教育という面でも体育は非常に多くの役割がある。

これを裏返して、現在と比較してみると、まるっきり環境が変わっているわけですね。多分、皆様方も同じだと思います。私どものときは、小学校は半ズボンでしたよ。中学へ入ると長ズボンになって、鉛筆だったのが万年筆になるわけですね。そして、親や親戚から腕時計をもらった。「ああ、大人への第一歩だ」と。今、幼稚園でも腕時計をしているんですよ。全然、環境が違ってきたのですね。

体も違います。2年ぐらい前ですが、中学3年生の平均身長は1メートル74センチです。私は、1メートル68センチ。今、年をとったから縮んでいると思いますけれども、同年代では真ん中より大きいほうでした。しかし、今や中学3年の平均身長が1メートル74センチ。

ところが、その大きくなった体に比例して、心臓、肺臓の機能が大きくなっているか——なっていません。むしろ、小さくなっています。骨はどうか。これまた必ずしも体に比例して、大きく太くはなっていません。骨が細いということは、それにつく筋肉も少ないということです。

変な例かもしれませんが、昔と今と比べると、子供の体自体、多少、大型になった。しかし、動かすエンジン、心臓、肺臓は、小型車を積んでいる。フレームは、軽自動車だと。さらに、子供が遊ばなくなりましたから、神経の発達が遅れております。したがって、運転系統は極めて危ない。これが、大人になって本当に日本を支えられる、まず体の面でもできるのかと。

もう一つ、今、IOCでも非常に問題にしているのは、3つのスクリーンの危険ということです。第1は、パソコンです。第2は、テレビゲームです。第3は、モバイルフォンです。全部、スクリーンから出てくるものです。

何を意味するか。全部、まず座ってできるということです。汗をかかなくて済むということです。体を使わないということです。

第2は何か。スクリーンに出てきたものが、コミュニケーションだと錯覚していることです。コミュニケーションというのは、相手の声の抑揚、表情、そういうものの中から「この人の言いたいのは何なんだ」ということをつかむのがコミュニケーションです。ただ文字が出てくるのは、インフォメーションにしかすぎません。それを小さいときからやるから、平気でモバイルに相手の悪口を書いたり、子供の間でのトラブルが生じる。実は、臨教審のときに、私は義務教育でコンピューター導入絶対反対と最後まで言っていた1人です。私は、そのときから、これをやることはコミュニケーションを失っていくことだということで反対しましたが、裏返すと、教育の適時性がありますから、義務教育でやらなくたって高校ぐらいからでも、好きになったらコンピューターは幾らでも使えるんですね。なぜ小学校、中学校、義務教育でやらなけ

ればいけないのか。義務教育でやるべきことは、むしろいっぱいあると。その時間、私に言わせれば、スポーツをやらせろ、鬼ごっこをやらせろと。むしろ、そういうことの中から、いろいろなものを入れる基礎としての体が生まれるのだと、こんなことを言っておりました。

というわけで、私は、スポーツと体育はちょっと違いますよと。スポーツは、逆に言うと、自らの意思で楽しむものです。体育は、与えるものです。ですから、裏返すと、私は小学校、中学校の先生に一番お願いしているのは、「体育嫌いをつくらないでください」ということです。汗を書くこと、みんなと一緒にやること、これを楽しくやるという基本を、まず教えてほしいと。「逆上がりができないから体育は嫌だ」という子供をつくらない。友達が手伝ってやって逆上がりをできるようにしてやる、そういう中から、私は体育というものの本質が生まれてくる。裏返すと、教えるということは要求が出るから、子供はやらなければならないとなると、苦痛になるわけです。できる子はうれしい。だけれども、できない子にとっては苦痛です。今の子は、嫌なことはすぐ逃げます。

したがって、体育嫌いをつくと、いつまでたっても汗を流すことをやらない。仲間と一緒に仕事をやることを好まない。だからこそ、逆に言えば、体育は子供たちがある意味で一番最初にぶつかっていく身体活動ですから、体育嫌いをつくらないでくださいよと。そして、体をつくる。その中から、スポーツを選んでいく。

ちょっと黒板を使わせていただきますけれども、別に難しいことはありません。私が言う今の意味での一番最初に出会うのは、学童のスポーツです。つまり、小中義務教育の中での体育ですね。そこから、学生のスポーツが生まれます。「もっとスポーツをやろう。運動部で頑張ろう。大会に出ていこう」、学生のスポーツが生まれるわけです。さらに、それが勝つことを理想、目標にすると、競技スポーツになるわけです。オリンピックその他。さらに、それで飯を食おうというと、プロスポーツになります。「いや、もうそんなことはいいんだよ。楽しくやろうよ」、レクリエーションスポーツが生まれます。「仲間づくり、楽しくやろうよ」と。それから、今、多くの方がやっていたら「健康のためのスポーツをやろうよ」と。簡単に言うと、スポーツといってもこれだけ種類があるわけですね。その中で、一つ一つについて指導者はどういうことを教えるべきかという、さっき申し上げた適時性という問題が出てくる。反面、こっちからいけば、何を目的にやっているのかと、スポーツの目的意識というものが出てくるわけです。それによって、スポーツといってもいろいろ違う。

今回お招きいただいた部分は、主としてここだと思います。高校、大学、学生のスポーツですね。そこへ来るまでに、こういうものがあるし、そこからさらにこういうところへ出ていく

人があるし、今日のスポーツ紙を見ると、全部ドラフトですよ。そうすると、今日のは高校生ですから、ここから、ある意味で言うと、いきなりここへ飛ぶということも出てくるわけです。といったように、スポーツにもいろいろな種類がある。そういう中で、では、何を考えて、そのスポーツをやるのかと。

ここで、私どもがやっておりますサッカーの現状を、お話しさせていただきます。

現在、サッカー協会登録人数は、約90万人でございます。細かく言えば、女性も含めて88万9,704人です。なぜこれがわかるかという、サッカーは全部、個人登録をさせているからです。中学生以上、全部、個人登録でございます。チーム登録と同時に、個人登録をさせている。そして、全部に選手証を出しています。これをやるために、コンピューターで全国をネットワーク化するので数億円を使いましたけれども、今や選手証を持ってこなければ公式の試合はできないというふうに、一人一人登録料。中学生は安いですが、それでも、1人700円はいただきます。それはなぜかという、我々は、スポーツというのは、学校を含めて全部、基本的にはクラブだという考えです。クラブである以上、登録をすべきです。メンバーシップと同時に、中学であっても大会をやれば、サッカー協会がグラウンドを手配し、審判を派遣し、全部、準備するわけです。裏返すと、受益者負担という考えなしに、クラブ員は成立しません。正直言って、中体連と大分もめました。「義務教育の連中から金を取るのか」と。「いや、私たちはクラブだと考えていますから、個人負担、受益者負担は当然だと思っております」ということをお願いして、了解していただきました。

というわけで、今、大学のほうからいきますと、私たちのところでは、47大学が大学連盟に加盟いたしております。高等学校は4,128校が登録されておりますし、中学校は5,792校、登録されておまして、それ以外、12歳以下の子供たち、それぞれいろいろなクラブでやっているわけですが、これが8,520でございます。こういうものをトータルすると、さっき申し上げたように、女性も含めませんが、88万9,704人。そのうち、いわゆるJリーグ、プロでやっている選手が何人いるかという、989人です。全体から見ると、0.1%です。つまり、1,000人に1人、プロがいるのであって、残りの999人はアマチュアだということですね。これは、世界中どのスポーツ、プロのあるスポーツを見ても、全部そうです。したがって、プロというのは、アマチュアが支えているんですね。

そして、皆様方と一番違うのは、私どもは、全世界が共通のルールの中で組織として動いているということです。つまり、国際サッカー連盟、今、世界で一番大きな競技団体、I O Cよりも大きいと言ってよいと思います。加盟が208あります。I O Cは205です。したがって、3

つ多い。その中に、直接全部、各NF——National Federationが加盟いたします。ただ、運営上、それを6つの大陸で分けてあります。アジア、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニア、北中米、カリブ海、南米と、オリンピックと違って、我々は5大陸ではなくて6大陸で一応分けて、一緒になっているいろいろな仕事をする。ただし、全部FIFA——国際サッカー連盟の傘の下に入っていますから、基本ルールは全くFIFAと同じということになるわけです。

FIFAでは、プロとアマ、昔から——昔からといってもある時期からですが、差別をするのは誤りであるという考え方が基本にございます。大昔は違います。1800年代、プロができたころは、「プロ？つき合わないよ」と。これは、ゴルフも同じですね。今や、プロのゴルファーは、むしろアマチュアのクラブの皆さんが「先生」みたいな格好でやるけれども、昔は、プロゴルファーは一般のメンバーシップの食堂には入れなかった。プロはいやしいものということで、食堂も全部別だったのがゴルフの世界ですね。今や、むしろ逆です。プロゴルファーで賞金が多ければ、一般の人も喜んで試合を見に行くし、ファンになります。

そういう意味からすると、プロとアマというものは、かつては「プロ？いやしいものだよ」、これが世界の共通のある意味での考え方でした。ところが、戦前もそうですけれども、だんだん戦後に近付いて、戦後、特に、いわゆる差別という問題が出てきて、「プロもアマも同じ人間がやっているのではないか」ということになりまして、1972年、キラニンIOC会長の時代に、IOCの憲章には「アマチュア」という言葉がなくなりまして、アスリート——競技者という名前になっていたわけです。

ところが、FIFA——国際サッカー連盟は、それ以前から、プロとアマと一緒にやるのは一つも悪いことではないと。なぜならば、アマチュアよりうまくて、さらに厳しいのがプロである。とすれば、アマチュアと一緒にやって学ぶことは幾らでもあっても、それによってアマチュアの人間が毒されることはない。では、共通項は何か。それは、フェアプレーでありスポーツマンシップだと。したがって、それに反する行為であれば、プロもアマも関係なしに、あるパニッシュメント——罰則がいくけれども、それはプロもアマも、グラウンドでやる以上、同じではないかと。したがって、サッカーでは、ボールも、人数も、ルールも、プロもアマもずっと一緒に同じものでやっているわけですね。

ということで、我々の基本的な考え方は、プロはアマよりもうまいだけでなく、より厳しい。だから、プロになれる。としたら、一緒にやってマイナスになるものはないという考え方。

陸上のほうでいくと、セバスチャン・コーという中距離ランナーの、これは名選手でした。世界記録を何回もつくった。800メートルとか1,500メートルで、すばらしいランナー。実は、



ロンドンオリンピックを招致する招致委員会の委員長がセバスチャン・コーで、今は英国女王から称号をもらって、ロードです。ロード・コー。

彼が、あるとき、こういう言い方をしました。ヴァイオリニスト、ピアニスト、演奏会を開く。大勢の人が聞きに来てくれて、感動して帰っていく。そのためには、毎日必ず練習をしている。としたら、練習なしに人を感動させることはできない。とすると、その練習時間を含めて、演奏会、入場料はある金額が出るし、出演料も高くなるのが自然である。とすれば、私——セバスチャン・コーが走ると5万人が見に来てくれる。そして、私の走りを喜んで、感動して帰ってくれる。としたら、その走りを維持するためには、毎日練習せざるを得ない。とすると、生活の主というものは毎日の練習で、一般の仕事ではもらえない。だから、給料をもらってプロになって、大勢の人が感動してくれるような走りを続けたい。実は、サマランチが会長になった1980年以降、セバスチャン・コーのこの言葉は、陸上におけるプロ化の第一歩と言ってもよいかと思います。彼が活躍したのはもうちょっと後ですが、それをよい意味で理論づけたといえますか、ということで、実は、スポーツ競技者は芸術家である、アーティストだという考え方が、今はI O Cの支配的な考え方です。

したがって、アーティストは、うまくなれば、演奏が上手になれば給料が高くなる、自然ではないかということですね。こういう関係で、アマとプロも、基本的に守るべきものはフェアプレーであり、スポーツマンシップ、これは昔からアマもプロも唱えていたことです。それが、ある意味でいくと、エティックス——倫理規定ですね。それぞれのスポーツをやる上での、倫理学と言うとオーバーですけれども、倫理的な規定として基準に置かれているのは、スポーツマンシップでありフェアプレーである、こういう考え方でやっております。

そこで、我々も、世界に追いつくためには、やはり多くの人が見に来てくれるような選手を育てる。とすれば、プロ化が大事だ、それによって初めて世界に追いつけるということで、1993年にJリーグを導入したわけです。

したがって、それ以降、ありがたいことにサッカー人口も増えましたし、指導者養成もいろいろな形でやっております。

さらに、私どもの一つの考え方、さっき申し上げたように受益者負担であるということは、選手だけではありません。役員も、コーチも、審判も、全部そうです。

したがって、私が1998年から2002年のワールドカップが終わるまでサッカー協会の会長をしておりましたが、毎年、私の登録費は1万円でした。毎回1万円ずつ毎年払って、会長という登録が生まれる。審判も、もちろんそうです。レフリー、そしてラインズマン——今

はアシスタントレフリーといますが、そういう人たちも、もちろん登録しなければいけない。コーチも登録する。そして、指導者はライセンス制度で、必ず勉強して公式のライセンスをもらって、初めて指導者として資格が認められる。勉強しないで指導者になるのはおかしいという考え方。全員とは言いませんが、一つの考え方は、指導者は腹が出るようではだめだと。指導者は、選手の模範になってやってみせるのに、本人が太古腹になって選手に走れとやって、そんなばかな話はないと。だから、指導者は必ず、まずコンディションを整えて、自ら生活を律するのが指導者であるという考え方ですね。そういう考え方でやっております。

ところが、やはりこういう考え方も、非常に選手の数が増えると、さっき申し上げたように、0.1%がプロフェッショナルですけれども、残りの多くの方は、必ずしもそこまでいこうとは思っていない。とすると、楽しくやるということも、やはり非常に大事なことです。ですから、そういう人たちにはあそこに書いたような、そういう指導、中身を考えないといけない。

元へ戻りますが、さっき申し上げた、中学へ入ると大人への第一歩だった。今や——私は本当に、これは野球に限りませんで、サッカーもそうですが、高校の指導者が選手のことを呼ぶときに、「私の子は」と言うんですね。不思議ですね。高校生は、子供なんですかね。「うちの子に限ってこういうことはしない。うちの子はいい子ですよ。うちの子の練習は……」、何で子供なんですかね、高校生が。私は、あれがまず第一、不思議ですね。これは、野球に限りません。サッカーでもそうです。大人として育てようというのに、指導者が外に向かって「うちの子」と言うんですね。ということは、高校3年生まで子供だということですよ。

となると、大変失礼ですが、私も多少、皆様方の議論を読ませていただきました。特待生問題とか。子供を扱うのだから、難しいですね。

私は、やはり高校生は、大人への第一歩として扱うべきだと思うんですね。まして、大学生はそうです。

にもかかわらず、現実には、大学へ行っても子供だということも現実なんですね。やってよいことと悪いことがわからない。ある意味では、昔、中学から大人への第一歩だったのが、今はむしろ大学を出て社会人になって、初めて大人への第一歩を踏み出すという環境が変わってきた。

とすると、私は、皆様方の野球憲章、あるいは大学野球連盟、高等学校野球連盟のいろいろな規約を拝見して、子供相手だったら、これは仕方がないのではないかと。変な言い方ですが、自分たちで判断できない子供たちだと、やはり教えるということ、その教える中身はこうあるべきだということ、これは時代の流れによって、多少は変えていかなければいけません、教

えるということがメインになると、大学野球も高校野球も体育だな、スポーツではないというのが私の印象です。

つまり、教えることが大事であって、その裏返しは何かというと、本人たちが考えるということ、ある意味でいくと、放棄する危険があるということです。子供たちが自分で何かを、さっき言ったように判断する。三角ベースのように、セーフかアウトまで子供たちが決めるんですよ。そういう中から、自然に自分で判断することが育ちます。しかし、「こうしてはいけない。ああしてはいけない。ルールはこうだ」と全部教えていくと、判断する力がだんだんなくなるのは、私は自然ではないかと。

そういう意味では、憲章、あるいは高野連、大学野球連盟の規約、こういうものは、ある理想論としてきちっと押さえておくことは必要だけれども、それを現場に適用するというのが、実際、失礼ですが、「大学、高校の監督さんは、これをお読みになっているのかな」と、最初に感じたのはそういうことですね。読むと、相当難しい、非常に格調の高い文章ですが、今の人は、あまり拡張の高いよりは、楽に読めるほうが読むのかもしれない。しかし、私みたいに戦前派だと、やはり「格調のある、よい文章だな」と思いますが、果たしてこれをお読みになっている方が、指導者でいらっしゃるのだろうか。逆に言うと、今の人たちにとっては読みにくい文章、それもまた事実だと思うんです。

そうすると、基本的には、これをかみ砕いたものをワンクッション置いて持つことが必要ではないのかなと。現実合った、入りよい、読みやすい、そういうものがあって、指導者がまずそれを読むということが、私は大事なような気がするんですね。

高校の特待生問題ですが、これは基本的には私学の学校経営と、やはり私は深い関係があると思っております。やはり、今や少子化の傾向がどんどん進みます。そうすると、学校経営という問題で、生徒をいかに集めるかということは、経営上、非常に大きなポイント。そのためには、名前を売らなければいけない。つまり、メディアにいっぱい名前が出るようにしなければいけない。とすると、優秀な選手を集めてきて甲子園に行く。夏に出る、春に出る、こういうところに学校名が出てくるようにしないと、学校経営という意味からは、なかなか難しくなる。そういうことで、私学では、私はある程度、仕方がないのかなと受けとめております。

ただ、ここで問題が出てくるのは、父兄の問題、後援会の問題ですね。このことが、あまり書き込まれておりませんが、父兄と後援会というものが、野球部に限っては特に、日本で一番盛んなスポーツだからこそ、多くの親が、あるいは周辺の人たちが、学校があるところへどんどん向かって進んでいく、つまり、勝っていくために、どういうことかと。それを応援しよう

ではないかという意識が、やはり非常に強いように感じます。これをどうコントロールするかというのが、もう一つ、私はやはり考えなければいけない点ではないかと。これは、ある意味でいくと、どこの連盟にも属していない人たちですから、コントロールするのは非常に難しい。しかし、どこかでそれをびしっと支える。少なくとも、指導者がそこら辺を考えてもらえることは必要だと思うんですね。

大昔ですが、私がまだグラウンドにたまに出るころですけれども、小学校の大会などを見に行くと、それはお父さん、お母さんの声援はすごいですね。監督になったつもりで言っていますよ。「何ちゃん、何でパス出さないの。うちの子がそこにいるじゃない」などやっていますよ。僕は、終わった後に、一言何か言えというから、「お父さん、お母さん、お子さんは何人いますか。男の子1人か2人でしょう。ここを教えている先生、今見ただけで30人、子供を教えているんですよ。去年も教えていたんですよ。来年も教えるんですよ。なぜ1人か2人しか教えない親が、指導者に文句を言うんですか。それより、うちへ早く帰って、子供の一番好きな手料理、つくってあげるほうがいいんじゃないですか。帰りにちょっと寄ってチーンなんて言うのを買って食べさせていたら、子供たちも、体、できませんよ」と。お母さん方、みんな嫌な顔をしていましたけれども、行ってみると本当に、熱心の余りに、むしろ指導者に対するプレッシャーになっている場合が多い。これを、子供であれば、特に高校などではどう抑えていくのか。ここら辺は、私はわかりませんが、なかなか難しいなど、サッカーを通じても感じることでありますから、見ております。

実は、さっき、私どもは個人登録だと言いましたが、個人登録のやり方というのは、一応、4種まで分けてあります。1種、2種、3種、4種、女性と。下からいくと、4種は12歳以下です。3種は15歳以下です。2種は、いわゆる18歳以下、高校ですね。年齢制限がないのが第1種です。ということは、別に16歳でも構わないんですね。30歳でも構いません。これによって、選手登録というものが行われていきます。一応、クラブとして登録し、さらに、その中から選手登録をしていくという形。したがって、クラブ数も把握できますし、一人一人選手証を出しますから、登録人数も把握できる、こういう形になるわけです。

今、簡単に数字だけちょっと申し上げておきますけれども、いろいろ考え方はありますけれども、1種というのは、チーム登録が7,000円です。そこに入っている選手の個人登録は、1人2,000円ちょうどいたします。2種、これは、チーム登録は2,500円、選手一人一人は1,000円です。全部、年間です。3種、これは同じく2,500円ですが、さっきちょっと申し上げたように、中学生の場合は、個人登録は700円です。年寄りのシニアというのものもあるんですが、

これはやはり多少、金をもらってよいだろうというので、クラブで7,000円、個人で2,000円という格好で登録いたしております。こういう格好で、ある程度、選手登録をきちっとして、世界中と同じように、何かあったらパッと連絡がとれる。なぜかという、今、一番大きな問題は、もう一つはドーピングなんですね。ドーピング問題が、今、スポーツ界では非常に大きな問題として扱われております。

したがって、把握していないと、特にトップクラスは一人一人を把握しておかないと、IOCが抜き打ちに検査をいたします。全く抜き打ちに、アットランダムでやられます。ですから、選手たちは今どこにいる、この期間はどこにいるというのを、全部登録するんです。特に、Jリーグの選手は。そうしないと、ドーピング問題に引っかかるわけですね。そんなわけで、登録というのが非常に重要な仕事になってきてしまっているということです。

1984年のロサンゼルスから、オリンピックに野球がデモンストレーションで入りました。1988年、デモンストレーション。1992年から正式競技。残念なことに、今回の北京で一応終わって、次のロンドンでは野球とソフトがございません。

皆様方は御存じかどうか知りませんが、実は世界の多くの国で、野球とソフトボールが組織として分かれている国は、極めてわずかです。こういうことが、あまり日本では知られていないんですね。ほとんどの国において、Baseball and Softball Federationです。一緒になっております。ですから、IOCで僕らはプログラム委員会の委員をやっているものですから、調査しますと、常に大体同じ数で登録数が出てきます。つまり、世界で野球をやっている国と地域は、今、110です。ソフトボールが、113です。つまり、ソフトボールだけやっているというところ、分けているところ、こういうのがあると、多少、数字が違いますが、現実にはそういうことなんですね。

そして、ソフトボールは、インターナショナル・ソフトボール連盟が、きちっとしてございます。したがって、オリンピックで大会をやるのは簡単。残念なことに、野球は世界を統一する連盟がございません。一応、国際野球連盟がありまして、アメリカのシラーが、今、会長をいたしております。

ところが、アメリカンリーグもナショナルリーグも、加盟はいたしておりません。同様のことが、日本でも言えますね。日本アマチュア野球連盟、JOCに加盟しております。しかし、加盟のメンバーの中には、セリーグもパリーグも入っておりません。ということは何かというと、オリンピックに選手を出しているのは、メンバーでないところから選手を出している、こういうことに理屈上はなるわけです。

しかし、日本では、野球は非常に盛ん。御承知のとおり、私も小さいとき、野球をやっていたと申しあげましたが、うちの親父はもっと好きで、私の小さな菓子屋に、戦前から職人を20人ぐらい雇っておりましたので、軟式野球のチームがありまして、戦前の下谷区では、いつも優勝いたしておりました。そのぐらい野球好きですから、私も小学校のときから六大学野球は、明治神宮へ随分見に行きました。

そして、昭和33年4月以降、新聞の記事が、プロ野球が六大学を抜いたわけですね。何がきっかけか——長嶋選手の巨人入団ですね。それ以前は、六大学野球のほうが、記事が大きかった。それが、昭和33年4月に逆転した。裏返すと、プロ野球がどんどん発展し、そのころはまだ六大学も、NHKが随分放送をやっていました。私のちょっと先輩ですが、連盟の役員もやっていたんでしょう、真田さんという産婦人科医の先生は、後ろから見るとすぐテレビで、独特の格好で「ストライク」とやるんですね。「ああ、真田さんが審判をやっているな」などと、NHKのテレビで随分見ました。

というように、ずっと野球は非常に盛んでいながら、逆に統一組織がない。この席で大変失礼ですが、腹をお立てになるかもしれませんが、私は、やはりあまりにも盛んで、長く日本でスポーツ界のトップを走ってきたために、メディアがはつきりつき過ぎたと。プロ、ざっくばらんに言いますれば、読売新聞。実業団連盟、毎日新聞。大学、高校、朝日新聞と。そのために、逆に言うと、統一組織が生まれにくい。そして、基本的に学生野球は長い歴史を持っていますし、日本で最初に野球をやったのは学生野球ですから、当然のことながら、体育としての野球を目標にしてやっておられますから、戦前の流れから見ても、アマチュアリズムというのが考え方の基本にあるというのは当然の流れだと、私は思っています。そして、さっきから申しあげているように、野球連盟というのが、形としては、国際野球連盟にはプロが入っていない。

となると、それぞれの野球組織というのは、自分たちが考えて一番よいという組織をつくってきたわけです。したがって、さっき申しあげたように、時代がいろいろな形が変わっていても、ある脈々とした流れというものがベースにはある。それを変えるというのは、なかなか私は難しいだろうと思うし、変える必要もないという部分も多くあります。

ただ、我々IOCの立場からすると、オリンピックから野球が去っていく。残念だけれども、仕方がないな。というのは、世界の統一組織がない。アメリカにも統一組織がない。日本にも統一組織がない。そして、もちろん韓国やカナダやオーストラリア、強いところはほかにもありますが、やはり一番盛んな日本、アメリカ。

一つの例ですが、我々、私はオリンピックプログラム委員会ですから、データがいっぱいあるので、持ってくるのは大変なので、ちょっと抜き書きしましたけれども、さっきちょっと申し上げました。サッカーは、205のオリンピック委員会のうち、国際サッカー連盟には208が加盟している。つまり、3つ、オリンピック委員会より多いわけですね。野球、これは208のうち110です。そして、その110というのは、アフリカが16、アメリカが27、アジアが19、ヨーロッパが37、オセアニアが31と、これがトータルすると110になるわけです。その中で、どれだけスポーツ欄で記事が出てくるかというのを野球について調べますと、アフリカでは、スポーツ記事の中で0.33%。アメリカでも、北は8.25%記事量がある。ところが、南アメリカになると0.06%に下がる。アジア、やはり日本、韓国は非常に盛んですから、7.92%の記事量。それがヨーロッパへ行くと、0.12%に下がります。オセアニアはまだ高く3%。これが、報道の記事量ですね。

実を言うと、こういう問題を含めて、我々、オリンピック委員会としては、全競技について調査しているわけです。例えば、今のは記事量です。さらに、スポンサーがどのぐらいについているかということも調べます。そうすると、野球の場合には——国際野球連盟ですよ。プロは入っていません——2つしかありません。2つとも、日本企業です。ミズノさんとSSKです。この2つが、スポンサーとしてついている。

ところが、サッカーになると、ソニー、サムソン、コカ・コーラ、こういうのがずらっと並ぶわけですね。こういうのが、裏返すと何かというと、我々が言うユニバーサリティー、ポピュラリティー。どれだけ世界にバランスよく広がっているか——ユニバーサリティー、どれだけスポンサーがつき、どれだけ記事量が出るか——ポピュラリティー、こういうことを全部、実は私どもは調査して、オリンピックが終わるたびに必ずやります。そして、次を考えるわけですね。

野球の場合、今申し上げたように、皆さん方は、「野球はオリンピックになくてもよい」というお考えがあるかもしれないし、「いや、やはり続けたほうがいいよ」というお考えがあるかもしれません。一番困ったのは、そういう全国的な組織がなかったということです。つまり、野球連盟というのは、日本を統括してくれないと、JOC——日本オリンピック委員会としては、派遣するわけにいかない。

そこで、山本英一郎さんといろいろ話した結果、日本アマチュア野球連盟をつくってほしいと、私はお願いしたわけです。統括組織ですから、学生野球連盟1つでは困るんですね。そこで、実業団と2つを一緒にして、全日本アマチュア野球連盟というのをつくっていただいて、

そこからロサンゼルスオリンピック派遣をJOCに出していただいた。当時のJOCの委員長は、柴田勝治さん、日大の理事長ですけれども、「岡野、応援しろ」、一言ですよ。「はい」というので、山本英一郎さんとは、大分、本郷で酒を飲みながらやりましたけれども、そのときから、国際野球連盟の会長、その当時はボブ・スミス、アメリカ人、ソフトボール、ドン・ポーター、アメリカ人——これは今でもやっています——と、実は話をして、一緒に仕事をしていたわけです。

そうしたら、ロサンゼルスで優勝してしまったんですよ。金メダルですよ。すごかったですね、あのときは。前の晩に、僕はたまたま用があってタクシーに乗っていたら、黒人の運転手でした。「おまえ、何で来ている？」と。「オリンピックだ」。「ああ、明日、アメリカと日本が野球やるじゃないか」。「うん。応援に行こうと思っている」。「やめとけ」と黒人の運転手が言うんです。「アメリカが勝つに決まっておる。日本が勝つはずがないから見に行くな」と。明るる日、実は行く暇がなくて行かれなかったんですが、勝ったというので、あの運転手を探してやろうかと思ったんですね。だけれども、ロサンゼルスで1人をつかまえるのは到底無理なので、つかまえられませんでした。

次のソウルオリンピックで銀メダル。そして、バルセロナで正式競技になったわけですね。行きました。余談で申しわけありませんが、私の楽しい体験。日本とアメリカの3位決定戦でしたか、女房と2人で応援に行きました。そうしたら、ボブ・スミスが来て、「おまえ、ファーストピッチ・セレモニーをやれ」と。日本では考えられなかったですね。始球式というのは、大会の1試合目だけだと思っていたんですよ。「ノー。何回やったっていいんだ」と、ボブが言うんですね。「おまえ、投げろ」。「少し練習させてくれよ」。「ノー。ファーストピッチだから、ファーストピッチ・セレモニー。練習なんかだめだ」と。ブレザーを脱いで、もらったグラブとボールで、硬球なんて持ったことがなかったですよ、長年。ワンバウンドは恥ずかしいので、力いっぱい投げたんですね。そうしたら、日本が先攻で、アメリカの黒人のキャッチャーの大きいのが、ジャンプしてとってくれたんです。それでも「ストライク」と言うんですね、空振りして。かつて、文部大臣が高校野球で投げたかったのはよくわかりましたね。こういういい気持ちのところはないんだなと。

実は、この間、北京でもやってきました、もう次がないので。シラーから、日本にいるときからファクスが来て、「おまえ、ファーストピッチをやれ」と。たまたまあいていて、あいている日が、運よく対中国戦でしたから、楽勝でしたね。そのときの始球式、「少し練習していいか」と言ったら、「端のほうならいい」というので、大分変わったんですね、アメリカも。



それで投げた。そうしたら、褒めてくれたんですよ。「おまえ、スナップがきいていて、ボールの回転がよくて、いいピッチやるじゃないか」。「そうか」なんて得意になって、いぎマウンドへ上がったらワンバウンドでした。残念でしたね、最後ぐらい……。

ところが、ちゃんと写真を撮っておいてくれて、送ってきましたよ。そうすると、投げた瞬間ですから、結構いいフォームなんですね。ボールがどこへ行ったかは、誰もわからないんです。

というわけで、実は、私は野球を何とかしてまた復活させたいという、私の個人の思いです。ただし、ソフトボールは、もっとかわいそうだと思います。

というのは、オリンピックしかないんですよ。日本がこれ以降も、アメリカ同様にプロを送るのなら、オリンピックは何も出なくてよいではないかと。御承知のように、国際野球連盟がワールドカップを既にやっていますから、3月に誰が監督をやるかで、この間までもめていましたけれども、「ワールド・ベースボール・クラシック」という名前を使わざるを得ないわけですね。これも、国際野球連盟は全く絡まない。アメリカには組織がないから、大リーグ連盟もない。ナショナルリーグとアメリカンリーグで選手会が主として相談して、WBCをやると。だったら、オリンピックに出なくてもよいではないかという考え方もあるわけです。

それに比べると、ソフトボールはオリンピックしかない。しかも、女子のスポーツだということで、同情は率直に言ってIOCの中でも結構高い。だから、ソフトボールはチャンスがあるかもしれません。

ベースボール、野球のほうでは、もう一つの大きな問題点があります。それは、さっきちょっと申し上げたドーピングの問題です。日本ではないと思いますが、アメリカの大リーグの選手は、やはりドーピングの疑いが非常に高い。3シーズン前ですか、ホームラン王になったマグワイア、自叙伝で「自分はテストステロンを飲んで筋肉を増強し、ホームラン王になった」と、本人が書いているわけですね、テストステロンの服用を。こういう問題があるので、非常に大リーグのオーナーたちは、優秀なバッターが、それで全部筋力を落としていって、オリンピックに出るような生活をする、戦力低下になるから出したくない。ここら辺が、今、アメリカでの最大の悩みだろうと考えています。

というわけで、実は私は、野球は長い歴史があるだけに、特にオリンピックとか組織とか、いろいろなことを含めて、そういう長い歴史から生まれたものを、新しい時代の中でどう扱っていくのかというのが、皆様方の大きな課題ではないのかなと拝見したわけです。

体の問題もあります。学校という中での教育の問題があります。さらに、それを取り巻く形

として、プロのスカウトの問題があります。さらに、それも含めて、親の野球に対する強い興味と魅力がある。それだけに、野球の問題を解決していくというのは、私は、非常に大変なんだろうなということを感じるわけです。

ある意味でいきますと、我々の場合には、上から下まで全部同じ考えで、同じルールで、もちろん国によって多少の差はありますが、基本的な考え方は同じ。何かがあれば、FIFAに提訴する。FIFAが最終決定をする。それでも決まらなければCASがやる。CASというのは、世界のスポーツ仲裁機構ですね。そういう、ある意味での国際的な考え方、組織というものの中で生きていく我々と、ある意味でいくと、全くそういうものが存在しない。しかし、日本という国を考え、あるいはアメリカだけを考えたら、長い歴史の中で育て上げてきたものがある。とすると、オリンピックというものをどう考えるのか。あるいは、オリンピックから離れて、もうよいと。プロ野球とも、ある意味で全然違う考え方で、教育、体育としての学生野球をどう考えるのかということは、これはやはり野球がこれだけ盛んになり、長い歴史を持っているだけに、いつかは考えなければならない。

よく言いますが、Rule is living——ルールは生き物だと。そして、There is no rule without exception——例外のない規則はない。こういうことを考えると、どういう弾力性、どういう許容範囲の中で、一番重要なものを残しながら、少しずつしろ新しく変わってきたものを取り入れていくかということが、大事なのではないかなと思いました。

いただいた時間をちょっと過ぎて、申しわけありません。あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、まとまりのない話になったかと思いますが、私の考えているスポーツ、そういうものをざっくばらんに話させていただきました。

私は、野球とソフトがオリンピックに戻るということを何とかやりたいなと思っているんですが、来月11日以降、数日間、ローザンヌでプログラム委員会があります。

ただ、私には、同じ時期に世界空手選手権がありまして、空手をオリンピック競技にという流れが、あるものですから、それを調査してレポートを出してくれというIOCからの要望もありますので、ローザンヌへ行くか、こっちで空手を調べるか、同じ時期なので、今、ちょっと悩んでおりますが、そんな中で、皆様方の野球、特に学生の野球というものに対するお考えを読ませていただいて、細かいところまでは、なかなか私の力では目が届きませんが、逆に言うと、私の今考えているアマ・プロ問題、サッカーでも、それからオリンピック問題というものを、ざっくばらんに申し上げました。何かご質問があれば、お答えさせていただくことにして、一応、私のほうからの一方的な話は、ここら辺で終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

○石井委員長 ありがとうございました。大変感銘深い、野球の世界ではなかなか考えにくいような問題も、提起されたと思っております。

せっかく、今、岡野さんもおっしゃっていただきましたので、ご質問とか、あるいはご議論にわたっても、もちろん結構だと思います。どうぞ御遠慮なく、委員の方々からご発言いただければ幸いです。

○辻村委員 大変興味深いお話を、ありがとうございました。印象深く伺わせていただきました。

1つ、御感想で結構でございますので、岡野さんの率直なお話を伺いたいんですが、今、ここでは高校生から大学生時代の野球生活のあり方といましようか、指針はどうあるべきかということを中心に議論しているわけですが、そこでスポーツ、あるいは体育の中での野球というのは、大変大きな役割を占めておるんですが、ともすると、野球の技術を上げようとする、それから野球の練習とか試合を通して、そのこと自体の中に教育的な効果とがあるということもあって、のめり込んでいってしまう。

しかし、高校生や大学生の時代というのは、もうちょっと広く学業といましようか、幅広い教養といましようか、そういうことをきちっとつけるべき時期だということもあるわけですね。そうすると、いわゆる学業とスポーツの両立という問題が出てまいりまして、細かく言うと、評価で言うとどのくらいでなければいけないとかという話になっていくんですが、中学校から高校、高校から大学にかけて、大変これが、ある意味、厄介な難しい問題になってくるんですが、そのあたりの学業と野球生活については、岡野先生はどんなふうにお思いなのか、率直なご感想でも結構ですので、伺わせていただければ幸いです。よろしくお願いたします。

○岡野氏 私自身が、今、一番感じておりますこと、それは日本の高校が中心ですが、大学も含めてよいとは思いますが、練習が多過ぎる、これが私の率直な印象です。多過ぎて、うまくならない。練習というのは考えてやるものが、私は一番大事なことだと思うんですね。裏返すと、練習時間が長過ぎて、考えないで言われたことをやって練習が終わる。「ああ、明日また練習か」ということで出ていくということで、本人が考える時間がない。だから、その競技自体に進歩が少ない。

と同時に、勉強もスポーツにプラスになるはずなんですね。つまり、時間の割り振りということきちっとするということは、生活を律する上で、やはり非常に大事なこと。とすると、

学生である以上、学業というものも当然大事なわけですから、学業の時間とスポーツの時間、それからそれなりに自分を磨く時間、例えば読書であったり、いろいろあると思います。そういうものの時間の割り振りというものをきちっとして生活するということが、私は、この時期、一番大事なことだと思うんですね。あまりにもスポーツに打ち込み過ぎて、むしろ、そういう基本的な生活のリズムというものを忘れていないかという感じが非常にいたします。

これは、率直に言って、Ｊリーグを含めて、これだけ練習しているのにどうしてうまくならぬのかなということを感じるのが実情ですね。もうちょっと考えてやるということの重要性を教えるべきではないかと思っています。

○石井委員長 野球だけではなくて、サッカー、あるいはほかのスポーツを含めて、今おっしゃったことは重要だという御趣旨ですね。

いかがでございましょうか。

○岡野氏 1つだけつけ加えておきますが、サッカーには特別指定選手という制度があるんですね。つまり、学生、高校生であっても、Ｊリーグのチームで練習できるんです。特別指定、つまり、所属しているチームと、Ｊリーグのクラブと、日本協会が認めれば、高校のチームに登録したままでＪリーグの試合にも出られるし、練習もできる。これは、選手たちが、自分を伸ばそう、よい意味で伸ばしたいという場合に、より高いレベルの練習を求めるときに、我々はそれを受け入れようということをやっているわけです。

ついこの間も、これはちょっと違う例ですが、大学に合格したんですが、Ｊリーグから誘われて、休学してＪリーグで２年やった。ところが、レギュラーの座がとれない。そこで、復学して、今、大学でまたすぐ今シーズン、非常に中心選手になって自分の技を磨いている、こういう例が、ついこの間も新聞に、これははっきり大きく出ていました。

ということは何かというと、我々の場合には、Ｊリーグのチーム、プロで入っても、帰ってもすぐどこでも出られる。Ｊリーグにいたから、大学では出られないということがない。裏返すと、大学の選手がＪ２で試合に出たり、これが認められている。これが、ちょっと皆様方のルールと違う点だなと、正直言って、比べますとね。

ただ、これは、私どもが基本的に、選手がより自分を高いレベルに持っていきたいと。そして、その労力を、当事者の学校の人たちも、引き受けるリーグも、そして協会も認めた場合にのみ許される。

それからもう一つは、大学や高校からリーグに入ったとき、大学４年、高校３年、そこで育

つわけですから、学校のクラブに対してそのJリーグのクラブから、見返りがお金として出ます。

例えば、この選手を育ててくれたということで、高校でいえば年40万円前後。3年間いたから120万円、そこの高校のサッカー部に——それを高校のサッカー部が、自分たちが受け入れるのか、学校の収入にするのかは知りませんが、それぞれ立場がみんなありますから、一応そういう形で、育てたということに対する見返りというものを出す。こんなことも、実はJリーグと協会が了解している一つの形で、野球ではちょっと考えにくいだらうと思いますが、一つの例として、うちではそういう格好でやっているということです。

○望月委員 興味深い話、ありがとうございました。

今、ここでは、学生スポーツとしての野球を発展させるためのルールはどうあるべきかという基本的なルールを考えているわけではありますが、学業との両立、先ほど辻村委員がおっしゃった点、一番頭を痛めているところでして、サッカーの世界では、そのところは競技団体として何らかの配慮をするのか、あるいは、それは自ら考えるべき性格のもので、競技団体としては、そこはあまり口を出さないというスタンスなのか、いずれであるのか。

競技団体として配慮しているのであれば、どんな方向でといいたいでしょうか、柱立てみたいところを御紹介いただければありがたいと思うんですが、お願いいたします。

○岡野氏 率直に申し上げまして、全く協会は関与いたしません。それぞれのリーグ、大学リーグなら大学、それぞれの所属している大学のサッカー部、そこがどういう考え方でやるかということは、全く自主的に判断してやってもらいたいということで、協会、リーグ全体としての統制といいますか、協力ということは一切なしに、自分たちでやってくれという考え方ですね。

○望月委員 関連になりますが、そういう形で特に問題がないところで、うまく運営できているという現状になるのでしょうか。

○岡野氏 今のところ、全然問題がないというわけではございませんが、大きな問題にはなっていないので、特に協会、あるいは大学、学生連盟で取り上げて問題にするということは、ここのございせん。

○浦川委員 大変興味深く伺ったのですが、サッカーの場合、プロ・アマの敷居が物すごく少ないということで、ある意味でうまくいっているのかなという気はしますが、1つお伺いしたいのは、一つのモデル、野球というのは、これはアメリカのスポーツモデルが来ていると思うんですね。日本も、同じような状態になったのだと思うんですけども、サッカーの場合、ア

アメリカの場合は、やはり学生のレベルというのと、アマと、いわゆるプロというものの区別が、例えば野球や何かの場合でも、非常に強いと思うんですね。アマチュアの場合には、学生の場合、エージェントと接触してはいけない。こういったようなものを含めて、プロ・アマ規制というのは非常に厳しいと思うんですが、サッカーの場合、アメリカでは無事にいっているのでしょうか。

○岡野氏　あまり、これも知られていないようですが、アメリカの大学のサッカーの人口は非常に多いということです。

ただ、プロが、もう既成のものが、野球、アイスホッケー、バスケット、いろいろなところで、テニスを含め、ゴルフを含めて、もうテレビの番組もほとんど占領されている。そのために、アメリカの選手はヨーロッパへ行ってプロになっていますね。

ところが、大学は、競技人口は物すごく多い。特に、女性は200万人います。アメリカの女性のサッカー人口は、べらぼうに多いんですね。

これは、御承知のように、アメリカは法律で、男子のクラブがあったら、女子のクラブも大学はつくらなければいけないのですね。これは、もう全部アメリカの法律で、この一番大きな問題は陸上で出たんですね。陸上競技で、男子に1万メートルがあるのに、なぜ女子に1万メートルがないのかというのが、いわゆる民事訴訟でアメリカで起きまして、それは差別であるという判決が出たおかげで、フェデラル・ロー——全米の法律として、大学、高校を含めて、男子の部があれば女子の部は必ずつくらねばならないという格好があるものですから、サッカーは非常に女子が増えたわけですけども、おっしゃられるようにアメリカの場合にはサッカーでも、やはり国際連盟のルールが優先するものですから、特に問題は起きないで、プロとアマという感覚で、ただ、アメリカの国内でプロはありますけれども、一遍ポシャったり、また最近やり直したりで、必ずしも大きな組織にはならない。おかげで、トップレベルの選手は、今申したようにほとんどヨーロッパへ行って、プロになって試合をしているということがありますので、それほど大きな問題にならない。アメリカでやるプロは、また逆に言うと、ヨーロッパで多少古くなった選手がアメリカへ渡って、プロのチームの中心になっているという格好で、アメリカは確かに独自の考え方ですね。

一番最初に、アメリカが独自だなと思ったのは、「国際ルールを変えてくれ。ルールを変えようではないか」と。「オフサイドがあるから、点が入らないからつまらない。アメリカのスポーツは、全部、点が入るようにできている」と。言われてみると、バスケットもアメリカンフットボールも、結構、点が入るんですね。たまには、それはアイスホッケーなどで点の入ら

ないときもありますけれども、それを国際サッカー連盟に提案したわけですよ。

国際サッカー連盟の答え。「世界中にゴールが幾つあると思っているんだ」。ゴールの大きさを広げるという提案もあったものですから、「とんでもない」と。「オフサイド、これがなかったら、ゴール前のスリリングな情景が生まれてこない。スリリングなシーンが出てこない。ルールを変えるというのは、もっと重要なことで変えてくれという要求ならわかるが、0対0でもゴール前のスリリングなシーンがあるのはサッカーなんだから」ということで、却下されたわけですが、そういう発想を、やはりアメリカはポッポッポッと出してきたんですね、最初。このごろ、ようやくおとなしくというか、静かになりまして、あまりアメリカから提案は出てこなくなったんですが、逆に言うと、やはり国際サッカー連盟の力というものを認めたと、私は受けとめております。

○田和委員 よく、野球のほうは組織がばらばらだから、サッカーを見倣えというお声があるんですが、サッカーの最高権威の方から、野球の歴史的な背景でどう位置づけていくかということを考えるようにというお話であったかと思うんです。

それから以前、岡野さんがどこかでお話しになったことで、サッカーの場合には、ルールが非常に簡単である。一方、野球のほうは非常に難しいというところで、なかなか普及が難しいのではないかとおっしゃったように思いますが、この野球憲章というのも、かなり細かいところまで規制をしております。プロ・アマの問題は、サッカーと一緒にならないので、野球ではいろいろな違反、暴力行為、たばこを吸っただとか自転車を盗っただとか、そういうことまでずっと規制して、教育の一環ということでやっておるんですけれども、そこまでやらなくてもよいとお考えかどうか。

それから野球の場合、留学生問題といって、その土地では試合に出られないから、別のところへ行ってやるというのが、甲子園の県対抗みたいなものが歪められているという声もありますけれども、岡野さんはどのようにお考えか、教えていただきたいと思えます。

○岡野氏 最初のほうの問題ですが、確かに野球のルールが細かいからということ、これは私、別の言い方で申し上げますが、世界で普及しない理由として挙げたわけですね。

それは、日本はやはり知的レベルが高い。教育が普及している。ところが、世界を見たら、残念ながら、まだまだ教育レベルが低い。したがって、分厚いルールブックは、まず覚えられない。そのために、審判が育たない。だから、非常に野球は世界で見たら難しい。

もう一つ申し上げたのは、これはルールではなくて、用具にお金がかかる。世界で見ると、日本は豊かです。しかし、アフリカ、アジア、中南米を見ると、必ずしも豊かな国が多いとは

限らない。そうすると、用具にお金のかかるスポーツというのは、残念ながら普及しない。これは、アメリカンフットボールをお考えいただければ、すぐわかると思うんですね。ヨーロッパでオフシーズンにやっていたんですが、結局、撤退してしまった。やはり、用具にお金がかかるのは、まだ世界的に見ると難しい。

その裏返しがバレーボールであって、東京オリンピックで初めて正式競技にしましたけれども、東京オリンピックのときには、柔道とバレーを正式競技として取り入れたわけですね。そういうルールがあったものですから。なぜ取り入れたか。金メダルがとりやすかったからですね。だから、メキシコオリンピックでは、柔道はないわけです。ミュンヘンから、また復活した。

逆に、バレーはメキシコから続き、今や競技人口は非常に多い。なぜかという、ボール1個あれば、サッカーと同じようにできる。ネットは紐一本張ればよいということで、用具にお金がかからないから盛んになる。これが、1つあります。

それ以外に、憲章の中で、細かいところにもいろいろ制約があるとおっしゃったわけですが、私は、それを読み手がどう理解するかという問題だと思うんですね。そこに、そういう意味ではルールの細かさということと、関係がゼロではないと思っています。だんだんと人間、文字を読むのが今の人は嫌いになってきましたから、やはり読みやすい、理解しやすい、格調の問題と別にして、さっきちょっと申し上げたように、そこにワンクッション置いた形で理解しやすいものをおつくりになるというのも、一つの方法ではないかと。精神は残す、しかし読みやすい、これがやはり、私は大事なことではないかという気がするんですね。

それから、留学の問題ですが、これはサッカーでもあります。特に、私学の場合は留学の問題がありますし、相撲ではありませんけれども、外国から高校生を入れる。これは、大学の駅伝もそうですけれども、外国から選手を入れる。特に、サッカー、南米あたりは盛んです。したがって、子供でもうまいのがいっぱいいる。ところが、貧しいから、奨学金のように呼んでやれば、喜んでそこでやる。陸上の駅伝も、アフリカの選手たち、自然と走っているから強いんですね。とすると、日本に来て勉強できるという魅力と同時に、教育も受けられる。そして、走ることも教えてもらえるということで入ってくるわけですね。これは、本当に留学ですよ、国外からの。こういうものが、日本の経済力と、それから受け入れ側の一つの熱意といえますか、外国から呼んででも勝とうという考え方、これも、ですからだんだん制限が出てきて、駅伝でも何名しか出てはいけないとか、そういう問題が出てくる。野球もそろそろそういうのが出てきて、ブラジルから来ていましたね、高校生が。



ああいう形が、日本のほうがレベルが高いから、必ずしも大勢、野球の場合は来ないけれども、サッカーだったら、極端に言えば、いっぱい呼べるわけですよ。今、全日本でやっている闘莉王などもそうですね。あれもブラジルから高校に来て、そして浦和に入って、今、やっているわけです。こういうのをどう抑えるかという問題は、これはある意味でいきますと、レベルアップということの問題であるわけですね、サッカーの場合は。

しかし、高校の場合、特に野球の場合には、やはり学校経営というところと結びついて、国内留学でも、やはりよい選手をとってやろう。ちょっと中国地方、広島では、なかなか出られない。だけれども、東北へ行ったら出られるとか、そういうことからお子さんたちが、やはりよい意味でいえば、甲子園への憧れですよ、はっきり言って。甲子園に行きたいというお子さんたちの希望、そしてまた、それを許す親の考え方、ここに一つの原因が、よい悪いは別にして、私はあると思いますね。

やはり、甲子園の魅力、それから基本的に、スポーツの持っている一つのよさですよ。スポーツが教育の役に立つのは何かといえ、ルールを守るという精神、つらくても頑張るという精神、こういう精神的な問題、そして、スポーツをやれば、誰でも勝ちたいと思う。その中から向上心が生まれる。向上心が生まれ、勝つためには我慢もし、努力もしという中に、教育的要素がある。そういう上のレベルをもう一つねらいたい、うまくなりたいたいという気持ちも、やはりお子さんにはあると思うんですね。そういうものがあって、しかも、親も甲子園に出したい、本人も出たい、受け入れる学校も「君なら採るよ」と。こうなると、野球留学というのは、私は消えないのではないかと。

それを、規制してよいのか。私学の場合だったら、自由というものがありますから、なかなか規制は難しいのではないかなど。就職の自由ではありませんが、就学の自由というものがあるわけで、学校を選ぶのは本人たちの自由ですから、それを規制するのは、ちょっと難しいかなという感じがいたしますね。

ただ、規制の仕方としては、一つの学校で何名までとか、あるいは、もう一切、出身のあれでこういうところは認めない、つまり、出身というものをどう考えるか。

これは、ある意味でいくと、つくったのは体協なんですよ、大本は。国体で出身別とかといって、天皇杯をとるため、皇后杯をとるために、生まれたところと同時に就職しているところ、あるいは出身学校で、そのときそのときに出ていたから、ジプシー選手というのが、一時、言われたわけですね。こういうものも、ある意味でいくと、日本のスポーツ界をコントロールすべきところは、裏返すとやっていたんですよ。だから、なかなかここをこうしろということは、

難しいのではないかなと思いますね。

○石井委員長　　今のお話を伺っていて思い出したんですが、野球の場合、大リーグとか、外国に選手が出ていくと、この間も、社会人の日石の選手がドラフトを拒否する云々で大騒ぎになったんですが、サッカーの場合には、もううまい奴がどんどん出ていけばよいのだという、俊介もどんどん行ってくれという基本的なのでしょうか。それとも、国内によい選手がいたほうがよいという考え方というのものもあるのでしょうか。

○岡野氏　　メディアから見ると、野球の世界の一つの目玉商品ですよ、ドラフトというのは。記事量の大きいこと。逆に言うと、大リーグへ出るということも、非常に大きな話題になるわけですね。それは、やはりまだ今もって、何となしに野球の世界で最高のレベルは大リーグだという考え方が日本中にあるから、大リーグへ行く。

それからもう一つは、給料が高いんですよ、大リーグは。僕は、サッカーでも言うんですけども、サッカーも物すごく高いんです、一流選手は。しかし、今、日本で生涯賃金というと、大体4億円ですよ。それを1年で稼ぐというのはおかしいよ。サッカーをやれる年数は短いけれども、やはりそれで5年やって、生涯賃金の5割増しぐらい取るならわかるけれども、1年や2年で生涯賃金を取るというのは、僕は幾らプロでも、世界中の流れだけれども、ちょっとおかしいという基本的な考え方は持っていますけれども、これは売り手と買い手ですから仕方がない。

サッカーの場合には、外へ出ていくというのは、本人がより高いレベルでやりたいということと、もう一つは、残るのはクラブとの契約問題だけですね。したがって、契約、今日の新聞に出ているので、浦和の選手が1人——サッカーの世界は、選手はほとんど代理人を使っていますから、そこで契約して、みんなやるわけですけども、それが浦和のバックの選手をソビエトに持っていきたいみたいなことが新聞に出ましたけれども、今度、彼は契約が切れるわけです。契約が切れると、移籍金が発生しません。ですから、外国はとりよいという形はあるんですね。ただ、契約がすべての基本ですから、契約期間中にこういうことになると、それは契約問題ですから、移籍金が発生したり、あるいは、今いるクラブと相手クラブとの間でトラブルが起きて、裁判ざたになったりということはありません。

ただ、この間のように、ドラフトの実業団を終わる選手が即向こうへ行くということが問題かということ、こういうことは、ないわけですね。そういうすべてを、ほとんどの場合は、代理人が実は海外との問題は処理していますので、今、日本でも、代理人が随分増えまして、国際サッカー連盟で試験を受けて、資格を取れば代理人になれますから、そうすると、それがク

ラブの選手と契約して、いろいろな条件、法律的な問題をクリアして契約書をつくっていくという感じで、それに違反した場合のみ、トラブルが出てくると。基本的には、契約問題だと考えています。

○石井委員長 その代理人というのは、弁護士とか、そういう法律家とは全く関係ない、別のクライテリアで資格を取らせるわけですか。

○岡野氏 はい。国際サッカー連盟の試験で合格すれば、代理人になれます。

○石井委員長 代理人を使うことが一般化するというのは、個人登録というベースがあるということと、かなり深い関係があるという理解でよろしいわけですか。

○岡野氏 そうですね。まず、例えばJリーグに入るときでも、早い連中は、もう契約しているのがありますから、そうすると、Jリーグに入るときに、入団のときの交渉も代理人がやってくれるということになるわけです。そして、最終的には契約書にサインをして、代理人にあるマージンを払うということになるわけですね。

○西岡委員 今の続きになるんですが、その代理人の方も、先ほどの登録制で登録されるんですか。

○岡野氏 はい。代理人になったら、必ず登録します。国際サッカー連盟に登録しないと、国際的な動きはできません。

○西岡委員 国内では。

○岡野氏 国内では、国内だけの問題だったら、ある程度まではやれますけれども、やはり国際サッカー連盟の資格試験を通っていないと、国内問題でもやれない。資格を持っているか持っていないかが基本になります。

○石井委員長 学生野球の場合に、よく教育の一環としての野球という概念といいますか、考え方というのが強調される、あるいは、そういうことがしばしば言われるわけですが、高校サッカーとか大学のサッカーについて、そういうワーディングというか概念を関係者がお使いになることがあるかどうか、ちょっと伺ってみたいんですが。

○岡野氏 寡聞にして、大学連盟でそういうことをやっているかどうか、実は私、残念ながら知りません。

ただ、はっきり、ある程度まで世界的な傾向として言えることは、大学でスポーツをやるというのは、世界ではあまり多くないということですね。アメリカでは多いけれども、ヨーロッパその他では必ずしも多くない。

例えば、一つの例ですが、昭和五十五、六年ですかね、スティーブ・ハイウェイというイン

グランドの選手が、リバプールでプロになった。そのときの新聞のトップの見出し、「学士プロ」ですよ。初めて大学出がプロになったというのが、スティーブ・ハイウェイがイングランドでプロになった時の見出しなんです。つまり、大学というのは、あまりスポーツをやっていないですよ、世界は。

○石井委員長 やらないですね。

○岡野氏 はい。一般論で言いますとね。それは、ケンブリッジとオックスフォードのボートとか、ラグビーとかはありますよ。だけれども、一般論でいくと、大学で野球、スポーツ全体を非常に盛んにやるというのは、日本とアメリカ。ほかの国は、大学は勉強するところで、あまりスポーツはやりません。

ですから、特にヨーロッパと比較するというのは、非常に難しいですね。やはり日本と似ているのはアメリカ。裏返せば、アメリカのまねをしたのかもしれませんが、やはり共通項があるのは日本とアメリカで、したがって、サッカーのようにヨーロッパで盛んなスポーツだと、アメリカとの対比というのは非常にしにくいわけで、同じような意味で、学生スポーツということを見ると、日本とアメリカでは比較ができるけれども、ほかの国とは、ほとんど比較ができないのではないかという感じがしますね。

○石井委員長 1966年ごろ、ドイツに留学して、そのときに、例のワールドカップがロンドンでありまして、最後に大騒ぎになったゴールの一件があったあの年ですけれども、最後にイングランドが1点とったかどうとか、ゴールになったかどうか、大騒ぎのあのときですけれども、大学の教授たちがテレビでサッカーのワールドカップを見るものではないという考え方がありましたね。助手クラスになると、もう一緒に、私などはサッカーをして遊んだ仲間ぐらいですけれども、これはもうテレビで当然見て、怒り狂って「あんなものは絶対にもう許さぬ」とか、「俺たちは絶対あのゴールは認めない」とか何とかと、やけ酒を一緒に飲んだことがあるんですが、やはり大学という世界とスポーツという世界は、基本的にあまり縁のないカルチャーがヨーロッパにはあるんだなと。

実際に私は、東京オリンピックにボートの選手として来たという学生に会ったことはありますね。これは、個人のレベルでボートというのはできるということと関係があるのかもしれないんですけれども。

○岡野氏 その裏返しになるかもしれませんが、プロの選手が、逆にプロを終わった後を考えて勉強するということは、ヨーロッパも南米も、逆にやりますね。

例えば、ブラジルのソクラテスなど——名前もソクラテスだから勉強するのもかもしれません

けれども、彼はブラジルのナショナルチームで、もちろんプロです。終わったときに医者になっていますよ。つまり、プロの生活をしながら、医学を勉強していたということですね。

○石井委員長 大学の学生として、勉強していたということですね。

○岡野氏 はい。それから、ペレも16歳からプロですから、ワールドカップに出たとき17歳ですから。でいながら、終わってから大学へ通って、体育の教員の免許を取っていますね。

というように、プロをやりながら勉強しているというのは、結構いるんですね。それから、アマチュア的ですけども、例えばスケートで、レイクプラシッドのときだったと思いますが、エリック・ハイデンでしたか、100メートルから1万メートルまで全部金メダルをとった。これは、アメリカの大学の医学生ですね。ですから、スポーツと勉強ということ、ある意味でいくと分けて考えている部分もあるわけです。だけれども、終わったら勉強しようという考え方は、第2の人生ということ考えている。

一つのおかしな日本独特の例ですけども、かつて、海外へ行くときには、入国カードに必ずProfession——職業という欄があったわけですね。すると、ほとんど日本のサッカーの選手は何と書くかという、Company employee——会社員と書くわけですね。ヨーロッパの者は、「そんなことを聞いているのではない。おまえは会社で何をやっているかが職業だ。エンジニアならエンジニアと書け。クラークならクラークと書け」と。「いや、午前中会社だけれども、午後サッカー」。「では、サッカーと職業に書け」と、これがヨーロッパの認識ですね。こういうところにも、日本はスポーツをやっているということが、よい意味で文武両道という感覚で、あるところで許されている。それに甘えている部分というのは、私は、学生スポーツでも、逆に言うと社会人スポーツでも、あると思うんですね。ここら辺の割り切り方が、むしろヨーロッパや何かのほうははっきりしていますね。「おまえ、午後練習していて、では、主としてサッカーで金をやっている者ではないか。そうしたら、ProfessionのところはSoccer playerと書けよ。Company employeeなんて曖昧なことを書くな」と、こういう感覚はヨーロッパですね。

ヨーロッパで、やはり大学へ行って勉強している連中から見ると、スポーツをやっているのは別世界の人間だという感覚が、基本的にはあります。「あいつらはスポーツをやっている。俺は勉強をやるんだよ」と。両方やるというのは、極めて少ない。ところが、日本では、逆にスポーツは大学でも高校でも、よい意味でやるものだと思っていますから、そういうものを社会でも受け入れている。こういう社会の受け入れ方というものが極めて違うということは、事実だと思えますね。

ただ、僕の知っている、やはりイングランドのサッカーの選手ですが、ケンブリッジの数学の先生もいますし、終わった後、ケンブリッジで数学を教えているというのがやはりいますから、両方やるのもいるけれども、では、いつそれをやったのかというと、学生のと きにもやっているというのは、案外少ないですね。学生のと きは、どっちかに割り切ってしまうている。

○石井委員長 部というのはないですよ。サッカー部とか野球部とか、それに相当するものが、ヨーロッパの大学にはほとんどない。

○岡野氏 ないです。だから、多種目をやりますよ、英国などでも。1人で、ラグビーをやり、サッカーをやり、ボートを漕ぎというのがいっぱいいるわけですね。

それがなぜできるかという、シーズン制がある。それで、シーズンオフのときにはほかのスポーツをやらされるわけですね。日本は、「オフシーズンになったから、サッカーをやっていましたけれども、冬はスキーを」などと言ったら、「冬も野球、サッカーの練習をしろ」と言われます。

ところが、外国は、オフシーズンになったら自分の好きなスポーツをまたやれますから、こういうところが、日本のスポーツ界全体の縦割り制度の一つの弊害というか歴史というか、これはやはり、そういう言い方をしたら怒られてしまうけれども、Inter Ministryみたいなものですよ。縦割りがあまりにも強くて、横の交流が少ない。だから、選手もそうになってしまう。本当は両方やったほうが、僕は幾つかやってもいいと思うんですけどもね。これ一筋というのは、最後に職業を決めるときにやればよいのだから。しかも、今の時代は、職業でも転職というのはいっぱいあるわけですから、昔と違って、これ一筋こそ人生というのとは、これまた環境が大分変わってきているという意味では、スポーツももうちょっとそういう考え方をしてもよいのではないかという気がしますね。

ですから、お子さんたちの御両親には、僕はよく言うんですよ、「チャンスがある。お子さんが隣でやっているラグビーをやってみたいと言ったら、やらせたほうがいいですよ。本人の素質に何が合うかは、やってみなければわからない。いろいろなものと、それからいろいろな指導者と出会うということは、決してマイナスではありませんよ。だから、本人がもしそういう考えを持ったら、やらせてあげなさい」と。「ただし、最後のとき、「よし、これでいこう」と決めたら、ある程度、頑張らねばいかぬけれども、それまでは、ふらふらは困るけれども、興味を持ったらいろいろな人と出会い、いろいろなスポーツとやってみるといのは、決して悪いことではないと思いますよ」ということは、私のスポーツに対する一つの基本的な考え方ですね。

○石井委員長 それでは、ちょっとロジスティックな事柄について申し上げたいと思います。

次回の本委員会は、12月2日、13時からでございますが、2人のプロ野球の選手からのヒアリングを行います。1人は、ヤクルトスワローズの宮本選手、それからもう1人が、ソフトバンクホークスの小久保選手、この2人をお呼びしてお話を聞き、またいろいろ質問、議論等をしたいと考えております。

これからの進行についての御相談でございますが、今申しましたように、しかるべくヒアリング等行ってまいります。一方で、多少、論点の整理のようなものを、今日もたくさん課題を岡野さんからいただいたようにも思いますし、そもそも読みにくいものをもうちよつと易しく書けということも含めて、さまざまな問題点があると思いますので、その問題点の整理と申しますか、洗い出しを、いわば詰めた形でやりたいと考えておりますので、小委員会を設けて、少し詰めて、来年の3月ぐらいまでの間にしかるべき形で行いたいと思っております。

時間の節約のため、私のほうから申し上げて大変恐縮ですが、小委員会のメンバーには、浦川委員、望月委員、田和委員、それから田名部委員、この4方をお願い申し上げたい。私も随時、その小委員会には出させていただく、そんな形で進めまして、本委員会としては、一応、この小委員会の仕事がめどをつけた段階で、何がしかの形のものをお示しできると考えておりますので、それを待って、4月ぐらい本委員会を再開したいと思います。

(異議なし)

○石井委員長 本当に岡野さん、ありがとうございました。お忙しい中、大変貴重な、また我々にとって示唆に富むお話をちょうだいいたしまして、我々もいろいろな問題を、これから今日の御指摘を受けとめて考えてまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

それでは、この会議はこれで散会いたします。